

〔共同研究〕

室町期における諸宗兼学仏教の研究（四）

室町期における諸宗兼学仏教研究会

はじめに

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）に着目し、著書『浄土十勝箋節論』（以下、『浄土十勝論』）十五卷ならびに『同輔助義』四巻を取りあげて、浄土学・天台学・真言学の研究者を中心に研究を行っている。具体的には、これまで一度も活字化されていない『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を中心に行っている。また、澄円とその著作に関する個人研究を翻刻作業等と並行して行っている。

共同研究については、翻刻篇（諸本と対校・校訂本の作成）と訳註篇（書き下し及び語註の作成）に分け、本年度は跋文十九章のうち第十一章から第十五章まで終了した。

今年度も昨年同様に跋文の翻刻作業を早く進めるために共同研究を中心に進めたため、個人研究を行わなかった。しかし、次年度は個人研究も精力的に進めていく方針であり、すでに『夢中松風論』等の他の澄円著作や、同時代に論を戦わせた夢窓礎石『夢中問答集』『谷響集』、交流のあった虎関師鍊『宗門十勝

論』といった諸典籍を収集している。共同研究については、残り四つの跋文の翻刻作業を終え、本文の作業を進めたいと考えている。

凡例

① 本編は、澄田撰『浄土十勝箋節論』の跋文第十九章のうち第十一章から十五章までについて、嘉永五年刊本を底本として翻刻・書き下し・語註を施したものである。対校本には、寛文三年刊本を用いた。なお、嘉永五年刊本には的門等による現存しない写本を用いた校訂の成果が残されており、適宜これも参照した。

② 校合に用いた諸本、及びその略称・略号は左の通りである。

当研究会所蔵・嘉永五年刊本…嘉永本

↓◎（本篇における底本）

大正大学所蔵・寛文三年刊本…寛文本

↓①

嘉永本校訂に使用された灯誉膳写本…古本

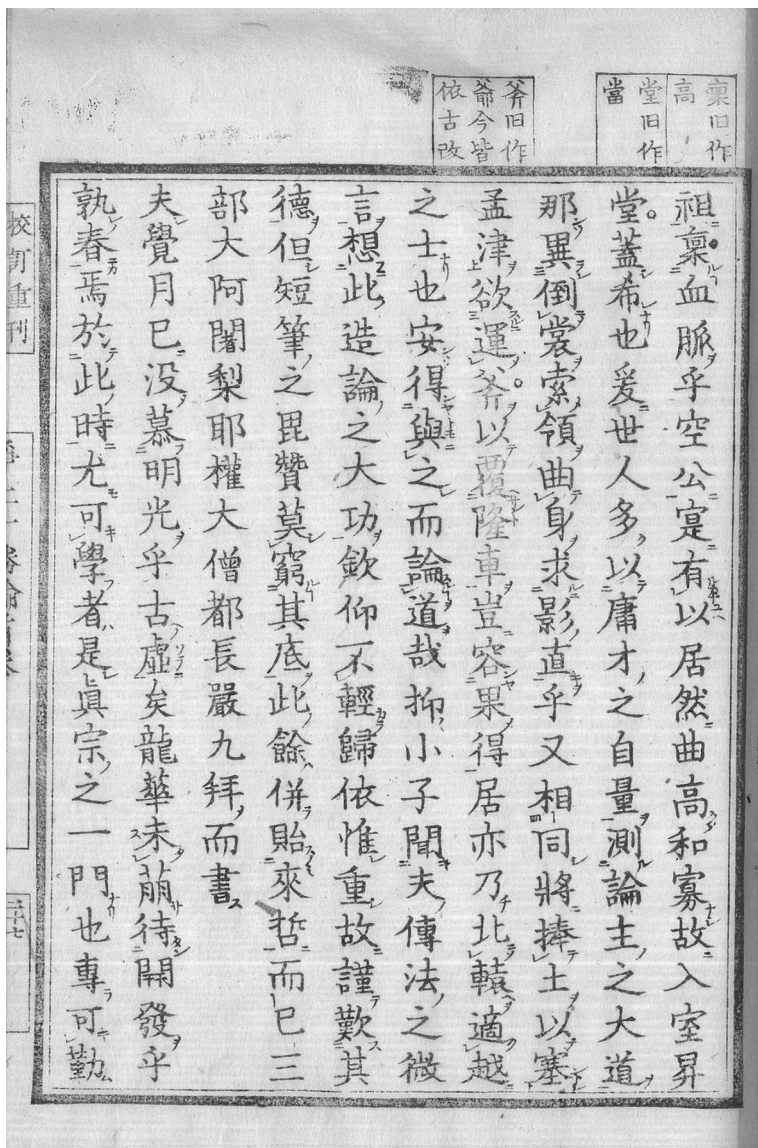
↓②

③ 上段に嘉永本の影印を載せ、下段に通行の正字（一部新字）による翻刻を施した。なお、翻刻の際に読みやすさを考えて「」を付した。

④ 頭註に嘉永本の丁数を付した。

⑤ 割註は「」にて示した。

⑥ 校合した各本の異同は脚注にて示した。



（卷首 二七丁才）

我
旧作

者、迺專修之妙行而已。爰有拔華大宗師、厥號曰淨
公上人矣。立言利人、造論行世、其述作爲體者、獵涉
衆典、徧詢群雄、或聞一勝、則銘之肺腑、或得一文、則
編之竹簡、總成乎一百箇篇矣。撰述慇懃、故見聞之
皁白、皆信敬之矣。抑此之典中、多援乎顯密釋教之
明文、載乎孔老外書之事蹟、往往也。學者不知其源
流、而妄爲臆說、推量皆以僻說矣。所以論主自爲末
書、以銷本文、而却庸愚之迷亂、故學者渙然冰釋矣。
夫元戎節度、耀光堯天、十勝靈威、布化舜土、然當代
多有、菽麥致迷之輩、欲詐親以謀公智識、深淺恣哉。

爺旧作
斧今並
依古

豈有鯖鰯襲狗狐豚冤虎乎小子得論文以看取其
意因茲信乎別願之玄遠堅乎往生之用心皆康永
旃蒙作罽之祀大族初八之日沙門快實謹題
夫真理本寂之中迷悟之假名忽絕矣中道隨緣之
前淨穢之身器速形焉爰彌陀慈父在淨刹以招其
欣求之人能仁悲母現穢方以激其厭離之心寔是
爺孃之悲憫乎抑亦郢匠之遣迎乎不可得而思議
者也能仁激勸之言雖廣通宣乎一代大悲窮極之
訓局在乎三部者矣倩案三部教王大都唯被于逆
謗之群類全不于大小之聖人矣乎爰有奉如來之

祝枕
旧作

掌旧作
掌今依
古

附囑降誕之真旦之大士京師光明導公上人是也
嗚呼空哉神德邁風霜禪那鑑淵海初施化益乎京
輦而王侯卿相之所宗後暗行跡乎終南而漱流枕
石而篤懃矣然則高卑皆戀恩宛如走獸之貪驂騮
皂白悉慕德猶似飛禽之追鳳鸞矣克達人利乎一
代書益乎萬世之理深入摩得勒迦三昧錄聖僧指
授靈邃矣其曲爲體運法舟乎苦海坦夷途乎火宅
詳勸三心激勸六字之廣百家所不逮諸哲莫之比
但窮神知化其言宏大兮可驚矣黜疑絕慮厥軌清
邀兮難蹈焉華夷皂白朝野尊卑各附所安鮮嘗此

論義味^ヲ自^ハ非^ル研精^ヲ以^テ考^ヘ章目^ノ之^ノ深玄^ヲ沉吟^ヲ以^テ察^ス文中^ニ
之^ノ起盡^ヲ無^ク以^テ立^テ匪石^ノ之^ノ信根^ヲ去^ル漆桶^ノ之^ノ疑惑^ヲ於^テ戲室^ニ
哉^ニ縱^ニ千鈞^ノ之^ノ黃金^ヲ未^ダ足^ク驚^ス其^ノ視^ヲ縱^ニ八種^ノ之^ノ妙音^ヲ
不^レ能^ク改^メ其^ノ聽^ヲ聞^ヲ之^ノ博^ヲ而^レ樂^ム愈^ニ深^ニ思^ハ之^ノ深^ニ而^レ信^ヲ彌^ニ篤^ニ皆^ハ
欲^シ罷^ト而^レ不^レ能^ク則^テ其^ノ非^ハ妄^ニ也^ニ必^ズ矣^ニ爰^ニ有^リ導公^ノ尊師^ノ之法^ヲ
孫^ハ其名^ヲ曰^ク圓大德^ノ神識^ヲ安閑^ノ形容^ヲ審定^ノ也^ニ能^ク合^フ神明^ヲ
之^ノ妙理^ヲ同^ニ天地^ノ之^ノ精醇^ヲ育^ヲ宇內^ノ之^ノ黎元^ヲ和^ニ域中^ノ之^ノ群^ヲ
有^リ矣^ニ爲^ス人^ノ也^ニ以^テ任^ス堪^ヲ而^レ爲^ス力^ヲ以^テ鑽^ス仰^ヲ而^レ爲^ス業^ヲ矣^ニ去^テ建^ス
武^ノ兵革^ノ之^ノ時^ヲ罹^ス赤眉^ノ之^ノ難^ヲ赤鯨^ノ而^レ曙^ス乎^ニ五夜^ノ食飲^ヲ
絕^ニ而^レ暮^ス乎^ニ三^ノ日^ヲ雖^モ然^ニ矻^シ乎^ニ而^レ誓^ス古^ノ之^ノ確^ヲ乎^ニ而^レ述^ス作^ス之^ヲ

問
旧
作

昔寒風破竹素雪積簷人訪艱辛答曰以忍辱而爲
衣故嚴寒不納膚以法喜而爲食故飢渴不惱心焉
此言誠也觀之者勢力勇健容色儼然也嗟乎孰與
尼父遭四謗而弦歌之與大德離賊難而鑽述矣凡
輯纂教法明決前判開發後滯維多矣則驚覺論松
風論淨土五祖辯同末書淨土諸祖系圖同光彩論
愚問賢答集蜀道論琢磨鈔呂律集二論問答集淨
土諸流緣起集二道對辯論二愚一賢集釋門息諍
論知恩報恩集親近知識集破邪顯正論能斷金剛
集淨土十勝論等幾乎一百軸盛行于世於中極文

抑旧古
並作附
恐非

窮理盡筆盡詞正，是此之十勝而已也。討尋之彙，非
英明而莫悟承領之輩，非行位而胡知矣乎？且然有
人嘖眉而曰：「小子得此論，欲明文取義，其文巨解，厥
義難領，頗是無要乎？」余曰：「言井蛙不知巨海，鷦鷯弗
翔蒼天者，仁者小量之謂乎？而聞吾語之且牟子曰：『
至味不合於衆口，大音不比於衆耳。』作咸池，設大章，
發蕭韶詠，九成莫之和也。張鄭衛之絃，歌時俗之音，
必不期而拊手也。故宋玉云：『客歌於郢，爲下俚之曲，
和者千人。』引商激角，衆莫之應。此皆悅邪聲，不曉於
大度者也。韓非以管闕之見，而謗堯舜，接輿以毛鷖

之分而刺仲尼皆耽小而忽大者也夫聞清商而謂之角非彈絃之過聽者之不聰矣見和璧而名之石非璧之賤也視者之不明矣神蛇能斷而後續不能使人不斷也靈龜發夢於宋元不能免豫且之網道無爲非俗所見不爲譽者貴不爲毀者賤用與不用自天也行與不行乃時也信與不信其命也今具聞之汝測己之難自耻慚者且自量自量矣問者服膺而却焉抑準夫玄牝三藏於自翻般若請御製序咸耀書記携所撰義海求惟心題跋之例論主自送十勝三軸以請跋文只知重貴命不顧短筆敬書其末

旧脱則
字今依
古補入

傲旧作
傲恐非

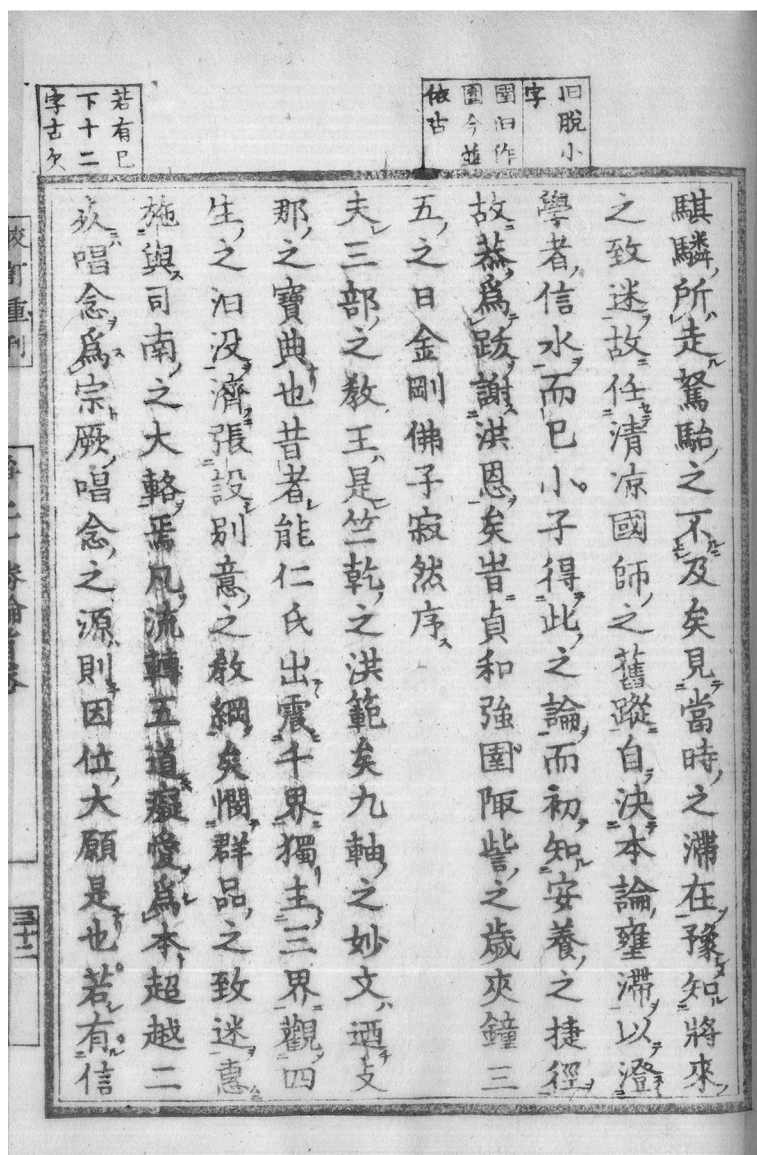
以歸之皆貞和第二柔兆隆婁季春十五之日朝議
卽源重澄謹題

佛教冲玄天人莫測言本則甚深語門則難入矣然
大聖悲憐訓俾歸安養是則易往之捷徑易入要門
也示厥捷徑指其要門卽是淨土十勝而已此之寶
典是鷲鳥之中一鶚乎衆星之間一月乎抑論主淨
公大德者智識弘毅而爲學者倚賴意乎橫目之蒼
生宣乎白淨之大法凡聞乎公辯論之人邴邴乎其
似喜乎公恭慕乎宣尼之三德爲自之德傲乎孔丘
之四憂而爲己之憂矣乎二道俱學義理懸通然而

校訂重刊

三十一

於眞宗尤善其玄極追年慧解愈高博達今古所以
益崔葦蒹葭之疏談以生藉麥黍稷之妙玄矣文華
熏松行學月照心靈矣以老婆心著一論益三際矣
其爲體也咸約經論演暢眞宗亦猶集群玉於荆山
約百川於溟海矣寔以爲絕妙焉然人皆讀論文滯
義趣是則大聲不入於里耳高言不止於衆心之謂
也凡公道冠重玄獨超方外問者雖言辯宏博口吐
而不合舌舉而不下乃逸而走矣子公或時試命諸
方學徒披講此論皆迷文法悉失深旨而繆解錯論
矣猶代大匠劉傷其手似香象所負非牛力之所堪



(卷首 三二丁才)

尚
今
作
信

敬受持者，則作世津梁。若有毀訛誹謗者，則爲泥梨
囚矣。抑圓公大士爲顯示二尊之密意，故作論論盡
文盡理，故可以開前疑而決後滯，披四霧而覩三景
矣。夫論主名翼飛乎天，德風靡率土，其智識叵測，注
而不滿，酌而不竭矣。對乎竊竊焉，茫茫焉之人，猶賓
賓而問學矣。故細流聚而爲巨海，土壤積而爲泰山，
以巨海洪波湯湯兮，彌乎蒼天，太山巔嶽嶸嶸兮，鄰
九空。故群英觀乎夫子，皆云嘻，學山龍象，請禮足下，
以資乎師資之禮乎矣。夫子公者，刻勵身心，高尚其
行，離異世俗，卓爾不群，高論妙雲牟尼之大教，清談

光明黑谷之遺風矣。樂智者上契聖旨下合物機而無誤。猶御寇之射術又似鸞鑑之照物尤可謂至人矣。抑論文多益故有道之縉白皆爲序跋以毗贊之矣。其文詞華麗霞煥錦舒極褒揚之美盡讚歎之誠愛小子不顧庸才書跋文結來緣高識之人莫致訕省貞和箸雍因敦南呂初三之日沙門妙快謹題。夫至理絕名彊立無爲中道之稱大極離生假有彼此去來之生厥無爲之中尤奇絕特妙是極樂之無爲也。其歿生之中殊最尊第一迺安養之往生矣。抑因毗提夫人遭禁閑之難釋迦能仁爲之開淨土之

門此中有三摩鉢提之深要箇裏有六字尊號之妙
行矣抑或晨丹或日本神僧大士詮註之者數不可
測矣鉅公名儒誦持之彙纂莫能算焉雖然不辯隨
自隨他之差降不論本誓非願之高卑妄任情取行
是則非只失彌陀六八之玄極亦大背能仁付屬之
明詔者也乎孰云卓犖拔萃之智人哉爰吾宗高祖
逞明兩三摩鉢提之優劣快示正雜二行之殿最寔
是懺判教之故質得立宗之骨法者乎故四方皆握
玩之八極同珍敬之誰不歸之者乎然有導公上人
異代之門役名淨公大德道邁三清神遊六合矣徧

妙 旧 作

緒 旧 作	本 旧 作	本 今 皆	依 古 改
-------------	-------------	-------------	-------------

拘 旧 古	並 作 物	恐 非
-------------	-------------	--------

謬テ名師旁求ム秘藏ヲ撈航ヲ既具ニ臺奥ニ必臻ル凡德字凝精
 神鋒爽拔ナリ矣以持念之餘暇下筆成章著キ十勝論三
 軸頗見稱ル乎作者夫經論者傳道之妙器歸鄉之直
 路也慈父教令云文字詮道一指示月矣學得文字
 一指竟亦更忘字指傀儡而知棚裏機關此即聖者
 所以有撰也明者所以能述矣微言之緒繼繼不絕
 矣於戲微論主吾門十勝執言之居後代矣述焉大
 凡天之爲ハ木鐸是吾先生而已乎夫大聖寬弘而不
 拘コウ小節諸子庸瑣以今論教而爲非細碎之間格量
 公之智識可謂以キ蠡酌海焉測淺深也矣公即聞タ他

（卷首 三四丁才）

不當之沮則默而不言矣或又先大息後向天而呵
呵笑焉然學者多明日耻慚矣今小子爲護法城作
不請友高製跋文恢闡真乘永代作程長冥示炬矣
峇貞和屠雍星紀仲呂初八之日三部大阿闍梨耶
實信序

稽夫六八宏誓之憲度如來授手之軌迹須臾卽詣
之速應聲感降之妙天麗且彌地普而深固非末學
膚受所能詳歎矣抑論主有生知之才能悟其玄邃
矣又凍則假衣於青陽之春_天喝則待冷乎玄冬之
寒風飢則思飽乎淨刹之百味渴則期飲乎八池之

【翻刻】（跋文第十一章～第十五章）

夫覺月已沒慕明光乎。古虛矣龍華未萌待開發乎孰奉焉。於此時尤可學者是真宗之一門也。專可勤

（卷首 二七丁才）

者迺專修之妙行而已。爰有拔萃大宗師。厥号曰淨公上人矣。立言利人造論行世。其述作為体者狎涉衆典徧詢群雄。或聞一勝則銘之心腑或得一文則編之竹簡總成乎一百箇篇矣。撰述慇懃故見聞之皂白皆信敬之矣。抑此之典中多援乎顯密教之明文載乎孔老外書之事跡往往也。學者不知其源流而妄為臆說推量皆以僻說矣。所以論主自為末書以銷本文而却庸愚之迷乱。故學者渙然冰积矣。夫元戎^①節度耀光堯天十勝靈威布化舜土。然当代多有菽麥致迷之輩欲詐親以謀公智識深淺。忝哉

（卷首 二七丁ウ）

豈有覬覦襲狗狐豚免虎乎。小子得論文以看取其

意。因茲信乎別願之玄邃堅乎往生之用心。豈康永旃蒙作罌之祀大簇初八之日沙門快実謹題。

夫真理本寂之中迷悟之仮名忽絶矣。中道隨緣之前淨穢之身器速形焉。爰弥陀慈父在淨刹以招其欣求之人能仁悲母現穢方。以激其厭離之心。寔是爺孃^②之悲憫乎。抑亦郢匠之遣迎乎。不可得而思議者也。能仁激勸之言雖廣通亘乎。一代大悲窮極之訓局在乎三部者矣。倩案三部教王大都。唯被于逆謗之群類全不于大小之聖人矣乎爰有奉如來之

（卷首 二八丁才）

附属降誕之真旦之大士。京師光明導公上人是也。嗚呼宜哉神德邁風霜。禪那鑑淵海初施化益乎京輦。而王侯卿相之所宗後暗行跡乎終南。而漱流枕石而篤懃矣。然則高卑皆恋恩宛如走獸之貪驕驢皂白悉慕德猶似飛禽之追鳳鸞矣。克達人利乎一代書益乎万世之理。深入摩得勒迦三昧録聖僧指

授壺邃矣。其典為體運法舟乎苦海。坦夷途乎火宅。詳勘三心激勸六字之廣百家所不逮。諸哲莫之比。但窮神知化。其言宏大兮可驚矣。黜疑絕慮厥軌清遡兮難蹈焉。華夷皂白朝野尊卑各附所安鮮嘗此

(卷首 二八丁ウ)

論義味。自非研精以考章目之深玄。沈吟以察文中之起盡盡無以立匪石之信根去漆桶之疑惑。於戲宜哉。縱雖千鈞之黃金未足驚其視。縱雖八種之妙音不能改其聽聞之伝而樂愈深思之深而信弥篤皆

欲罷而不能則其非妄也。必矣爰有導公尊師之法孫其名曰円大德。神識安閑形容審定也。能合神明之妙理同天地之精醇育宇內之黎元。和域中之群有矣為人也。以任堪而為力以鑽仰。而為業矣去建武兵革之時罹赤眉之難。赤裸裸而曙乎。五夜食飲絕而暮乎三日。雖然屹乎而稽古之確乎。而述作之

(卷首 二九丁才)

皆寒風破竹素雪積簷人訪艱辛。答曰以忍辱而為

衣故嚴寒不納膚以法喜而為煖故、飢渴不惱心焉此言誠也。觀之者勢力勇健容色儼然也。嗟乎孰与尼父遭四謗而弦歌之与大德離賊難而鑽述矣。凡輯纂教法明決前判開発後滯維多矣。則驚覺論松風論。浄土五祖弁。同末書。浄土諸祖系図。同光彩論。愚問賢答集。蜀道論。琢磨鈔。呂律集。二論問答集。浄土諸流縁起集。二道対弁論。二愚一賢集。釈門息諍論。知恩報恩集。親近知識集。破邪顕正論。能斷金剛集。浄土十勝論等幾乎一百軸。盛行于世。於中極文

(卷首 二九丁ウ)

窮理尽筆詞正是此之十勝而已也。討尋之彙非英明而莫悟承領之輩非行位而胡知矣乎。且然有人嘖眉而曰小子得此論欲明文取義其文叵解厥義難領頗是無要乎。余曰言井蛙不知巨海。鷦鷯弗翔蒼天者仁者小量之謂乎。而聞吾語之且牟子曰至味不合於衆口大音不比於衆耳作咸池設大章發簫韶詠九成莫之和也。張鄭衛之絃歌時俗之音必不期而拊手也。故宋玉云客歌於郢為下俚之曲

和者千人引商激角衆莫之応。此皆悦邪声不曉於大度者也。韓非以管闢之見而謗堯舜接輿以毛鷲

（卷首 三〇丁才）

之分而刺仲尼。皆眈小而忽大者也。夫聞清商而謂之角非彈絃之過聽者之不聰矣見和璧。而名之石非璧之賤也。視者之不明矣。神蛇能斷而後統不能使人不斷也。靈龜寢夢於宋元不能免豫且之網綱道無為非俗所見不為譽者貴不為毀者賤用与不用

自天也。行与不行乃時也。信与不信其命也。今具聞之汝測己之難自恥慚者且自量自量矣。問者服膺而却焉。抑準夫玄奘三藏於自翻般若請御製序。咸耀書記携所撰義海。求惟心題跋之例。論主自送十勝三軸以請跋文。只知重貴命不顧短筆。敬書其末

（卷首 三〇丁ウ）

以帰之。皆貞和第二柔兆隆婁。季春十五之日朝議^⑧即源重澄謹題。

仏教沖玄天人莫測。言本則甚深語門則難入矣。然

大聖悲憐訓俾帰安養。是則易往之捷徑易入要門也。^⑨示厥捷徑指其要門即是淨土十勝而已。此之宝典是鷲鳥之中一鶚乎。衆星之間一月乎。抑論主淨公大德者智識弘毅而為學者倚頼。意乎橫目之蒼生宣乎白淨之大法。凡聞乎公弁論之人邴邴乎其似喜乎。公恭慕乎宣尼之三德為自之德倣乎孔丘之四憂而為已之憂矣乎二道俱学義理懸通。然而

（卷首 三一丁才）

於真宗尤善其玄極。追年慧解愈高博達古今。所以芸萑葦兼葭之疏談以生稻麦黍稷之妙玄矣。文華熏松行学月照心靈矣。以老婆心著一論益三際矣。其為体也咸約經論演暢真宗。亦猶集群玉於荆山約百川於溟海矣。寔以為絕妙焉。然人皆說論文滯義趣。是則大声不入於里耳高言不止於衆心之謂也。^⑩凡公道冠重玄独超方外。問者雖言弁宏博口呿而不合舌举而不下乃逸而走矣。子公或時試命諸方学徒披講此論皆迷文法悉失深旨而繆解錯論矣。猶代大匠劉傷其手似香象所負非牛力之所堪

(卷首 三一丁ウ)

騏驎所走驚駘之不及矣。見當時之滯在豫知將來之致迷。故任清涼國師之旧蹤自決本論壅滯以澄學者信水而已。小子得此之論而初知安養之捷徑。故恭為跋謝洪恩矣。皆貞和強圉陬訾之歲夾鐘三五之日金剛仏子寂然序。

夫三部之教王是竺乾之洪範矣。九軸之妙文迺支那之宝典也。昔者能仁氏出震千界獨主三界觀四生之汨沒濟張設別意之教綱矣。憫群品之致迷惠施与司南之大輅焉。凡流軫五道癡愛為本超越二死唱念為宗。厥唱念之源則因位大願是也。若有信

(卷首 三二丁才)

敬受持者則作世津梁若有毀訕誹謗者則為泥梨囚矣。抑円公大士為顯示二尊之密意故作論。論尽文尽理故可以開前疑而決後滯披四霧而觀三景矣。夫論主名翼飛乎天德風靡率土。其智識叵測。注而不滿酌而不竭矣。対乎窃窃焉芒芒焉之人猶賓

賓而問學矣。故細流聚而為巨海土壤積而為泰山。以巨海洪波湯湯兮弥乎蒼天太山巔嶽嶸嶸兮隣九空。故群英覲乎夫子皆云。嘻學山龍象。請礼足下以資乎師資之礼乎矣。夫子公者刻励身心高尚其行離異世俗卓爾不群高論妙雲牟尼之大教清談

(卷首 三三丁ウ)

光明黒谷之遺風矣。樂智者上契聖旨下合物機而無誤猶御寇之射術又似鸞鑑之照物。尤可謂至人矣。抑論文多益。故有道之緇白皆為序跋以毘贊之矣。其文詞華麗霞煥錦舒極褒揚之美尽讚歎之誠。爰小子不顧庸才書跋文結來緣。高識之人莫致訕。皆貞和箸雍困敦南呂初三之日沙門妙快謹題。

(卷首 三三丁才)

夫至理絶名。彊立無為中道之稱。大極離生假有彼此去來之生。厥無為之中尤奇絶特妙是極樂之無為也。其死生之中殊最尊第一迺安養之往生矣。抑因毘提夫人遭禁閉之難积迦能仁為之開浄土之

門。此中有三摩鉢提之深要。箇裏有六字尊号之妙行矣。抑或晨丹或日本神僧大士詮註之者数不可測矣。鉅公名儒誦持之彙纂莫能筭焉。雖然不弁隨自隨他之差降。不論本誓非願之高卑。妄任情取行。是則非只失弥陀六八之玄極。亦大背能仁付属之明詔者也乎。孰云卓犖拔萃之智人哉。爰吾宗高祖逞明兩三摩鉢提之優劣快示正雜二行之殿最。寔是協判教之故質得立宗之骨法者乎。故四方皆握玩之八極同珍敬之。誰不歸之者乎。然有導公上人異代之門役。名淨公大德。道邁三清神遊六合矣徧

（卷首 三三丁ウ）

諮名師旁求秘藏。梯航既具壺奧必臻。¹⁸凡德宇凝精神鋒爽拔矣。以持念之余暇下筆成章著十勝論三軸。頗見称乎作者。夫經論者伝道之妙器¹⁹帰郷之直路也。慈父教令云文字詮道一指示月矣。学得文字一指竟亦更忘字指傀儡而知棚裏機関此即聖者²⁰所以有撰也。明者所以能述矣。微言之緒²¹繼不絶矣。於戲微論主吾門十勝孰言之居。後代奚述焉。大

凡天之為木鐸²²是吾先生而已乎。夫大聖寬弘而不拘小節。諸子庸瑣以今論教而為非細碎之間格量公之智識。可謂。以蠡酌海焉測淺深也矣。公即聞他

（卷首 三四丁才）

不当之沮則默而不言矣。或又先大息後向天而呵呵笑焉。然學者多明日恥慚矣。今小子為護法城作不請友高製跋文恢闡真乘永代作程長冥示炬矣。皆貞和屠雍星紀仲呂初八之日。三部大阿闍梨耶実信序。

（卷首 三四丁ウ）

- (1) 戎 我 ①
 (2) 爺 斧 ①
 (3) 枕 柎 ①
 (4) 嘗 掌 ①
 (5) 問 同 ①
 (6) 拊 附 ①②
 (7) 隆 降 ①
 (8) 即 郎 ①
 (9) (則) ①になし
 (10) 傲 傲 ①
 (11) 也 + (矣) ①
 (12) 匠 近 ①
 (13) (小) ①になし
 (14) 圉 圉 ①
 (15) 主 王 ①
 (16) 若有信敬く十二文字なし①
 (17) 尚 高 ①
 (18) 手 篇 弟
 (19) 妙 沙 ①
 (20) 緒 諸 ①
 (21) 不 弗 ①
 (22) 木 本 ①
 (23) 拘 口 ①

【読み下し及び註】（跋文十一章〜十五章）

【快実】

夫れ覺月已に没して明光を古えの虚に慕う。龍華未だ萌さず。開發を孰れの春にか待たん。此の時に於て尤も学ぶべき者は、是れ真宗の一門なり。専ら勤むべき者は、^{すなわ}邁ち専修の妙行なるのみ。爰に拔萃の大宗師有り。厥の号を淨公上人と曰う。言を立てて人を利し、論を造りて世に行ず。其の述作の爲体は衆典に獵涉し、群雄に徧詢す。或は一勝を聞く則ば之れを心腑に銘じ、或は一文を得る則ば之れを竹簡に編じて、総じて一百箇篇を成ず。撰述懇懃なるが故に見聞の皂白皆な之れを信敬す。抑此の典の中に多く頭密釈教の明文を援き、孔老外書の事跡を載すること往往なり。学者其の源流を知らずして妄りに臆說推量を爲して皆な以て僻說せり。所以に論主自ら末書を爲りて以て本文を銷して庸愚の迷乱を却く。故に学者渙然として氷釈す。夫れ元戎の節度は光を堯天に輝かし、十勝の靈威は化を舜土に布く。然るに当代多^{かんねん}く菽麦致迷の輩有りて詐り親みて、以て公が智識の深淺を謀らんと欲す。忝いかな。豈に購^{しゅうぐ}駒の狗を襲い、狐豚の虎を免ること有らんや。小子論文を得て以て其の意を看取す。茲れに因りて別願の玄邃を信じ、往生の用心を堅む。皆に康永旃蒙、作^{さかく}罽の祀、大族初八の日。沙門快実謹みて題す。

【重澄】

夫れ真理本寂の中に迷悟の仮名忽に絶し、中道随縁の前には淨穢の身器速かに形る。爰に弥陀慈父は

淨刹に在て、以て其の欣求の人を招き、能仁⁽⁸⁾悲母は穢方に現じて、以て其の厭離の心を激す。寔に是れ爺嬢^{やじょう}の悲憫^{ひみん}か。抑^{おさへ}亦た郢匠^{よしやう}の遣迎^{せんよう}か。得て思議すべからざる者なり。能仁激勸の言、廣く一代に通亘^{つうごう}すと雖も、大悲窮極の訓は局て三部に在る者なり。倩^{つらつち}三部教主の大都^{おおとね}を案ずるに、唯だ逆謗の群類に被らしめて、全く大小の聖人の干^{ため}ず、爰に如来の附属を奉て真旦に降誕するの大士有り。京師光明の導公上人是れなり。嗚呼、宜^{むべ}なる哉。神徳風霜に邁^{すす}ぎ、禪那淵海を鑑とす。初めは化益を京輦^{きやうりん}に施して、而して王侯卿相に宗^{たの}まれ、後には行跡を終南に暗くして、而して流に漱^{くちす}き、石を枕として篤勸^{とくこん}す。然ば則ち高卑皆な恩を恋う宛も走獸^{かりゆう}の驕驕^{きやうきやう}を食るが如く、皂白悉く徳を慕う。猶し飛禽^{ひきん}の鳳鸞^{ほうらん}を追うに似たり。克^{よく}く人は一代に利あり、万世を益するの理に達して、深く摩得^{まなろきや}勒迦^{りやくか}三昧^{さんまい}に入て、聖僧指授の壺遼^{こすい}を録す。其の典^{ていたち}の為体く法舟を苦海に運び、夷途を火宅に坦^{たいらげ}て三心を詳勘し、六字を激勸することの廣きこと百家の逮^おわざる所なり。諸哲も之れに比すること莫し。但^た但^た神を窮^{きう}め、化を知る。其の言宏大にして驚くべし。疑^{しりぞけ}を黜^{しりぞ}て慮いを絶つ。厥^あの軌清遼^{きせいぎやう}にして蹈^ふみ難し。華夷の皂白朝野の尊卑、各に附て安ずる所に此の論の義味^{なめ}を嘗ること鮮^{すくな}し。研精して以て章目の深玄を考え、沈吟して以て文中の起尽を察するに非ざる自りは、以て匪石^{ひせき}の信根⁽¹⁴⁾を立て漆桶^{しつづう}の疑惑⁽¹⁵⁾を去くること無けん。於戲^{あゐ}、宜^{むべ}なる哉。縦い千鈞の黄金なりと雖も、未だ其の視ることを驚かすに足らず。縦い八種の妙音なりと雖も、其の聴くことを改むること能わず。之れを聞くこと博^{あまねく}して楽^{いよいよ}うこと愈^{いよいよ}深く、之れを思ふこと深くして信ずること弥^{いよいよ}篤^{あつ}し。皆な罷^{やめ}んと欲すれども能わず。則ち其れ妄に非ざること必せり。爰に導公尊師の法孫有り。其の名を円大徳と曰う。神識安閑にして形容審定なり。能く神明の妙理に合して天地の精醇^{しょうじゆん}に同じ。宇内の黎元^{れいげん}を育^{やしな}つて域中の群有^{ぐんゆう}を和

ぐ。為人、任堪を以て力とし、鑽仰を以て業とす。去し建武兵革の時、赤眉の難に罹て、赤裸裸として五夜を曙し、食飲絶えて三日を暮しぬ。然と雖も屹乎として稽古し、確乎として述作す。皆に寒風竹を破り素雪簷に積む人、艱辛を訪うに答て曰く「忍辱を以て衣と為るが故に嚴寒膚に納らず、法喜を以て澹と為るが故に、飢渴心を悩さず」と。此の言誠なるかな。観れば勢力勇健にして容色儼然たり。嗟乎、尼父の四謗に遭いて弦歌せしと、大徳の賊難に離て鑽述せしと、孰与や。凡そ教法を輯纂して前判を明決し、後滞を開発すること維れ多し。則ち『驚覺論』、『松風論』、『浄土五祖弁』、同末書、『浄土諸祖系図』、同『光彩論』、『愚問賢答集』、『蜀道論』、『琢磨鈔』、『呂律集』、『二論問答集』、『浄土諸流縁起集』、『二道対弁論』、『二愚一賢集』、『釈門息諍論』、『知恩報恩集』、『親近知識集』、『破邪顕正論』、『能断金剛集』、『浄土十勝論』等一百軸に幾く、盛に世に行ず。中に於て文を極め、理を窮め、筆を尽して詞を尽せるは正く是れ此の十勝のみなり。

討尋の彙、英明に非ざれば悟ること莫けん。承領の輩、行位に非れば胡ぞ知らんや。且然に有人、眉を嚨めて曰く、小子此の論を得て文を明かして義を取らんと欲するに、其の文解し巨く、厥の義領し難し。頗る是れ要無しかと。余が曰く、井の蛙巨海を知らず、鷦鷯蒼天に翔けずと言うは、仁者が小量を謂うか。而聞け、吾れ語らん。

且く『牟子』が曰く、至味は衆口に合わず。大音は衆耳に比せず。咸池を作し、大章を設け、簫韶を発し、九成を詠するときんば、之に和するもの莫し。鄭衛の絃を張り、時俗の音を歌えば、必ず期せずして手を拊つ。故に宋玉が云く、「客、郢に歌いて下俚の曲を為すに、和する者千人。商を引きて角を激する

ときんば、衆之れに応ずるもの莫し」と。此れ皆邪声を悦びて大度を暁らざる者なり。韓非が管闕の⁽³²⁾見を以て堯舜を謗り、接輿が毛鷲の分を以て仲尼を刺る。皆小に耽りて大を忽にする者なり。夫れ清商を聞きて之れを角と謂うは、⁽³³⁾弾絃の過に非ず、聴く者の聡ならざるなり。和璧を見て之れを石と名づくるは、璧の賤しきに非ず、視る者の明ならざるなり。神蛇能く断じて後続けども、人をして断ぜざらしむること能わす。⁽³⁴⁾靈龜夢を宋元に発すれども豫且の網を免るること能わす。道は無為にして俗の見る所に非ず。誉る者の為に貴からず、毀る者の為に賤からず。⁽³⁵⁾用と不用とは自ずから天なり。行と不行とは乃ち時なり。信と不信とは其れ命なり。⁽³⁷⁾

今具に之を聞かば、汝が己を測るの難、自ら恥慚せん者か且く自量せよ。自量せよといえ、問者服膺⁽³⁹⁾して却きぬ。抑夫の玄奘三蔵自翻の般若に於て御製の序を請い、咸耀書記所撰の義海を携て惟心の題跋⁽⁴⁰⁾を求めんの例に準じて、論主自ら十勝三軸を送りて以て跋文を請う。只貴命を重することを知りて短筆を顧みず、敬て其の末に書して以て之に帰す。峯に貞和第二、柔兆隆婁、季春十五日、朝議即源重澄謹て題す。

【寂然】

仏教は沖玄⁽⁴⁵⁾にして天人も測ること莫し。本を言えば則ち甚深なり。門を語らえば則ち難入なり。然るに大聖悲憐して訓えて安養に帰せしめたまう。是れ則ち易往の捷徑、易入の要門なり。⁽⁴⁷⁾厥の捷徑を示し其の要門を指すは即ち是れ『浄土十勝』のみ。此の宝典は是れ鷲鳥の中の一鶚か。⁽⁴⁸⁾衆星の間の一月か。

抑^{そも}論主浄公大徳は智識弘毅⁽⁴⁹⁾にして学者の倚頼⁽⁵⁰⁾たり。横目^{おうもく}の蒼生^{そうせい}を意^いうて白浄⁽⁵¹⁾の大法⁽⁵²⁾を宣ぶ。凡そ公の弁論を聞くの人は邛邛乎⁽⁵³⁾として其れ喜べるに似たり。

公恭しく宣尼⁽⁵⁴⁾の三徳⁽⁵⁵⁾を慕うて自らの徳と為し、孔丘の四憂⁽⁵⁶⁾を倣^{なら}いて己が憂と為して、二道⁽⁵⁷⁾俱に学び、義理懸^{はる}かに通ず。然れども真宗に於いて尤も其の玄極を善くす。年を追いて慧解^{えげ}愈^{いよいよ}高く、博く古今に達せり。所以^{ゆえ}に荏葦兼葭^{かんいけんか}の疏談^{くそだん}を芸^うりて、以て稻麦黍稷^{とうばくしよしよく}の妙玄を生ず⁽⁵⁸⁾。文華、松行に熏じ、学月、心靈を照らす。老婆心を以て一論を著して、三際^{さんさい}⁽⁶⁰⁾を益す。

其の為^て体^{いた}や、咸く経論を約して真宗を演暢^{えんちやう}す。亦た猶し群玉を荆山^{けいざん}に集め、百川を溟海^{めいかい}に約するがごとし⁽⁶¹⁾。寔に以て絶妙なりと為す。然るに人皆な論文を読みて義趣^{ぎしゆ}に滞す。是れ則ち、大声^{だいしやう}、里耳^{りじ}に入らず、高言、衆心に止まらざるの謂^いなり⁽⁶²⁾。

凡そ公の道は重玄^{ちゆうげん}⁽⁶³⁾に冠らしめ、独り方外^{ほうがい}⁽⁶⁴⁾に超えたり。問者、言弁宏博なりと雖も口呿^{ひら}けて合せず、舌挙げて下らず、乃ち逸^にげ走る。子公或る時、試みに諸方の学徒に命じて、此の論を披講^{ひかう}せしむるに、皆な文法に迷い、悉く深旨を失して繆^{びゆう}解^げし錯論^{さくろん}す。猶し大匠に代わりて劉^{けす}るに其の手を傷くるがごとく、香象の負う所、牛力の堪うる所に非ず、騏驎^{きりん}の走る所、驚駘^{どうたい}⁽⁶⁵⁾の及ざるに似たり。当時の滞在^{あらかじ}を見て豫め将来の致迷^{ちめい}を知る。故に清涼国師の旧蹤^{きゆうそう}⁽⁶⁶⁾に任せて自ら本論の壅滞^{ようたい}を決して、以て学者の信水を澄すのみ。

小子此の論を得て、初めて安養の捷徑^{しやうけい}を知る。故に恭く跋を為して洪恩を謝す。時に貞和強圉^{ていわきやうぎよ} 阞訢^{そうれし}⁽⁶⁷⁾の歳、夾鐘三五^{きやうしうさんご}⁽⁶⁸⁾の日、金剛仏子寂然序す。

【妙快】

夫れ三部の教主は是れ竺乾の洪範なり。九軸の妙文は迺ち支那の宝典なり。昔、能仁氏出でて千界に震い、独り三界に主として四生の汨没を觀じて、済うに別意の教綱を張設し、群品の致迷を憫みて、恵むに司南の大輅を施与す。凡そ流轉五道には癡愛を本と爲し、超越二死には唱念を宗と爲す。厥の唱念の源は、則ち因位の大願是れなり。若し信敬受持すること有る者は則ち世の津梁と作り、若し毀訕誹謗すること有る者は則ち泥梨の囚と爲る。

抑 円公大士は二尊の密意を顯示せんが爲に、故らに『論』を作る。『論』文を尽くし、理を尽くすが故に、以て前疑を開き、而も後滯を決り、四霧を披いて、而も三景を觀つべし。夫れ論主は名翼、天に飛び、徳風、率土に靡かす。其の智識、測り叵し。注げども満たず、酌めども竭きず。窃窃焉たり、芒芒焉たるの人に対しても、猶お寶實として問ひ学ぶや。故に細流聚めて巨海と爲り、土壤積みて泰山と爲る。以みれば、巨海の洪波は湯湯兮として蒼天に弥り、太山の巔嶽は嶭嶭兮として九空に隣る。故に群英夫子を觀て、皆な云う。嘻ぐも学山の竜象なり。請う、足下を礼して、以て師資の礼を資らんと。夫れ子公は身心を刻勵し、其の行を高尚にし、世俗に離異して卓爾として群ぜず。妙雲牟尼の大教を高論し、光明黒谷の遺風を清談す。樂智は上聖旨に契い、下物機に合うて、而も誤り無きこと、猶し御寇の射術のごとく、又た鸞鑑の物を照らすに似たり。尤も至人と謂いつべし。

抑 『論』文益多し。故に有道の緇白、皆な序跋を爲りて、以て之れを毘贊す。其の文詞、華麗にして霞のごとくに煥り、錦のごとくに舒べて、褒揚の美を極め、讚歎の誠を尽くす。

爰に小子、庸才を顧みず、跋文を書きて来縁を結ぶ。高識の人、訕りを致すこと莫れ。

峇、貞（92）和箸雍困敦南呂初三の日、沙門妙快、謹んで題す。

【実信】

夫れ至理名を絶す。彊（93）いて無為中道の称を立つ。大極生を離れたれども、仮に彼此去来の生有り。厥（94）の無為の中に尤も奇絶特妙なるは、是れ極楽の無為なり。其の死生の中に殊に最尊第一なるは、迺（95）ち安養の往生なり。

抑（96）毘提夫人禁閉の難に遭うに因て、釈迦能仁之れが為に浄土の門を開く。此の中に三摩鉢提（97）の深要有り。箇（98）の裏に六字尊号の妙行有り。抑（99）或は晨丹、或は日本、神僧大士詮詮の者、数測るべからず。鉅公名儒誦持（100）の彙（101）、籌（102）も能く筭（103）すること莫し。然りと雖ども随自随他の差降を弁ぜず。本誓非願の高卑を論ぜず。妄（104）りに情に任せて行を取る。是れ則ち只弥陀六八の玄極を失するのみに非ず。亦大に能仁付属の明詔（105）に背く者なり。孰（106）れか卓犖拔萃（107）の智人と云んや。爰に吾宗の高祖（108）遅しく両三摩鉢提の優劣を明し、快く正雜二行の殿最を示す。寔に是れ判教の故質（109）に協（110）い、立宗の骨法を得たまえる者か。故に四方皆之を握玩（111）し、八極同じく之を珍敬す。誰か帰せざるの者か。

然に導公上人異代の門役有り。淨公大徳と名づく。道三清に邁（112）き、神六合に遊んで、徧く名師（113）に諮（114）て旁秘蔵を求む。梯航（115）既に具して、壺奥（116）必ず臻（117）る。凡そ徳宇凝精にして、神鋒爽拔なり。持念の余暇を以て、筆を下して章を成し、『十勝論』三軸を著せり。頗る作者に称せ見る。夫れ経論は伝道の妙器、帰郷の直

路なり。慈父の教令に云く、「文字道を詮す、一指月を示す」と。文字一指を学得し竟て、亦更に字指の傀儡を忘れて、棚裏の機関を知らば、此れ即ち聖者の撰有る所以なり。明者の能く述する所以なり。微言の緒、継継して絶えず。

於戲、論主微せば吾門の十勝孰れか之を言わんや。後代奚ぞ述せんや。大凡そ天の木鐸と為るは、是れ吾が先生のみ。夫れ大聖は寛弘にして小節に拘わらず。諸子は庸瑣にして今の論教を以て、非と為して細碎の間に公の智識を格量す。謂つべし。蠡を以て海を酌むに、焉んぞ浅深を測らんと。公は即ち他の不当の沮みを聞くときは、則ち黙して言わず。或は又先ず大息し、後に天に向て呵呵と笑う。然に学者多く明日に恥慚す。今小子法城を護らんが為に、不請の友と作りて、高く跋文を製して真乗を恢闡し、永代に程りて作し、長冥に炬を示す。

時に貞和屠雍星紀仲呂初八之日。三部大阿闍梨耶実信序す。

- (1) 拔萃：拔粹の意。多くのものの中でとびぬけてすぐれていること。
- (2) 渙然：とけ散るさま。
- (3) 元戎節度：天子が将帥に出征を命ずる際、その符節として賜る太刀や旗のこと。
- (4) 堯天：舜土と対句。堯・舜は共に理想的な帝王の名であり、天と土と組み合わせることで理想世の中のことを意味している。
- (5) 菽麦：豆と麦のこと。
- (6) 跸駒：ハツカネズミのこと。
- (7) 康永旃蒙作罽之祀大族：康永四年（一二四五）乙酉の一月八日のこと。「旃蒙」とは十干の乙の異称、「作罽」は酉のこと、「大族」は一月の別称。
- (8) 能仁：よく導く人の意で、ここでは釈尊のこと。
- (9) 郢匠：『莊子』の故事で、「郢」は郢人、「匠」は巧匠で、この釈尊と阿弥陀仏の善巧を例えたもの。善導『観経疏』『華座観』の部分には「斯乃二尊許應無異。直以隱顯有殊。正由器朴之類萬差。致使互爲郢匠。」（『浄全』二・四四上）として使用され、良忠『伝通記』には、『莊子』に説かれる巧匠が郢人の鼻の先に塗った土を斧で落とした故事があてられている。
- (10) 驊驢：良馬の名。周の穆王の八駿の一つで赤栗毛の馬のこと。
- (11) 飛禽鳳鸞：「飛禽」は空を飛ぶとりの通称。「鳳鸞」は神の鳥で、赤い色の鳥を「鳳」、青い鳥を「鸞」と称された。ここでは空を飛ぶ鳳凰を追いかけるようなものという意で、無謀なことのたとえとして用いられている。
- (12) 摩得勒迦三昧：『翻訳名義集』によると、「摩得勒迦。此云智母。以生智故。菩薩入此三昧作論申經。儒家以析理精微名論造。」（『正蔵』五四・一一一三下～一一一四上）とあり、菩薩がこの三昧に入ると「論」を作り、「経」まで説くことができるという。深い学徳を得たという境地を、この境地に例えたと考えられる。
- (13) 清遼：高遠な姿のこと。
- (14) 匪石之心根：「匪石」は石に非ずの意で、石ころのように転がることがないということの例え。ここでは「匪石の心根」として、転がり揺らぐことのない心、固く揺るぎのない信心を例えた語。
- (15) 漆桶之疑惑：「漆桶」は漆を入れた桶のことで、真つ黒なものという意。また、仏教において「何の智恵もない者」を例えることもあるというが、ここでは「漆桶の疑惑」として真つ黒な疑惑、根深い疑いの心を例えたものと考えられる。
- (16) 黎元：全てのの人々のこと。

- (17) 群有：万物のこと。
- (18) 建武兵革：一三三六年（建武三）二月二十九日に南朝方が兵革（戦）を理由として元号を「延元」と改めたこと。しかし足利方の北朝はこれを認めなかった。
- (19) 赤眉の難：中国の新末後漢初に起った農民を中心とする内乱のことだと思われるが、ここでは日本の南北朝期の内乱を例えたものか。
- (20) 艱辛：悩み苦しみのこと。
- (21) 飡：餐の字と同義で、食べ物・飲み物のこと。
- (22) 尼父：孔子のこと。
- (23) 四謗：孔子が魯・衛・宋・蔡の四国を追われたこと。（『莊子』漁父篇）
- (24) 鷦鷯：スズメ目ミソサザイ科の鳥。全長約十センチで日本産で最小の鳥。春にさえずる。
- (25) 牟子：一卷。牟融撰。後漢の成立。具名を『牟子理惑』といい、『理惑論』ともいう。『隋書経籍志』の儒家類、『唐書芸文志』の道家類に取り上げられている。清の孫星衍が『求明集』に見られるものを抽出して一卷とし、これが『百子全書』に収められている。
- (26) 咸池：堯の時代に用いられた音楽の名前。
- (27) 発簫詠詠九成：簫詠の楽を九回演奏すること。成は楽曲の一終。出典は『漢書』で同文あり。
- (28) 鄭衛之絃：みだらな音楽を奏すること、もしくはその準備をすること。古代中国において、鄭と衛の国はみだらな音楽を奏でることで有名であったとされる。
- (29) 宋玉：楚の人で、屈原の弟子。楚の大夫という官位についていた。師の屈原が迫害されたことに悲しんで九辨と招根を作った。
- (30) 下俚：下俚巴人という語が『綜佛年報』三三号の註九三にも出ている。
- (31) 接輿：楚の狂人。孔子が政治にかかわったのに対し、接輿は狂人のふりをして政治に関わらなかった。
- (32) 聞清商而謂之角：五音（宮・商・角・徵・羽）は清・濁・高・下によって分けられる。ここでは「清商」を「角」と聞き間違えたということ。
- (33) 和壁而名之石非壁之賤也、視者之不明矣：『韓非子』和氏からの引用。
- (34) 神蛇能斷而後統不能使人不斷也：『淮南子』説山訓からの引用。
- (35) 豫且：春秋時代の宋国の漁人。

- (36) 不為譽者貴不為毀者賤：ここは「譽を為さざる者は貴し、毀を為さざる者は賤し」と訓ずべきか。
- (37) 用与不用自天也、行与不行乃時也、信与不信其命也：『弘明集』〔正蔵〕五二・五中〕からの引用。
- (38) 自量。自量矣：ここは「自量せよ自量せよ」と訓ずべきか。
- (39) 服膺：心にとどめて忘れないようにすること。
- (40) 抑準夫玄奘三蔵於自翻般若請御製序：玄奘が自ら翻訳した經典や論書に対して、その序分を唐の太宗に請うたというできごとで、『広弘明集』卷第二に玄奘の「御製三蔵聖教の序を請う表」〔正蔵〕五二・二五八上〕や、太宗の「玄奘法師の前表に答うる敕」などが収められている。ここではこのできごとになぞらえて、澄円が重澄に序の執筆を請うたとしている。
- (41) 咸耀書記携所撰義海求惟心題跋之例：咸耀が記した書物を惟心のもとに届け、題跋を請うたという故事を例として用いたようだが、咸耀と惟心が何者が判明せず、惟心は恐らく『翻訳名義集』の序を書いた唯心宗葵のことかと思われるが、はっきりとはしない。
- (42) 貞和第二：日本の南北朝期の北朝方の元号で一三四六年。
- (43) 柔兆隆婁：「柔兆」は十干の丙の別称。「隆婁」は「降婁」の誤りか。十二次の「降婁」は戌の別称。
- (44) 朝議即：寛文三年版によれば「朝議郎」。「朝議郎」は唐代の官職で正六位下。
- (45) 奥深いこと。
- (46) 極樂世界に往生する近道。
- (47) 極樂淨土に入る肝要の門。
- (48) 偉大な鷲の中でも鶚のように特に優れたもののこと。
- (49) 博学多識、知識が広い。
- (50) 学ぶものの頼りとするところ。
- (51) 世の人々、人の目は横についていることから横目という。
- (52) 清らかな教え。ここでは淨土往生の教えのこと。
- (53) よろこぶさま。
- (54) 孔子のこと。名は丘、字は仲尼。また漢の平帝が孔子に褒成宣尼公と追諡した。
- (55) 孔子が掲げた三つの徳。『中庸』によれば智・仁・勇。
- (56) 孔子が魯・衛・宋・蔡の四国を追われたこと。

- (57) 儒教と仏教。
- (58) 「おぎ」・「あし」のように実の乏しい議論を薙ぎ払うこと。
- (59) 「いね」・「むぎ」など五穀のように実のある奥深い道理を説き明かすこと。
- (60) 過去・現在・未来の三世。
- (61) すぐれたものを集めること。これは荊山で玉を集め、海に百川を集めることに例えている。
- (62) 深遠な道理は俗人には理解されないこと。『莊子』天地篇にある。
- (63) きわめて奥深いこと。
- (64) 世俗を超越したところ。
- (65) 驚馬。歩みの遅い馬。オの劣る者のたとえ。
- (66) 華嚴宗第四祖澄観（七三八〜八三九）のこと。元和五年（八一〇）に大統清涼国師と加賜される。『八十華嚴』の註釈書である『華嚴経疏』六〇巻を著すが、弟子の要望に応じて新たに『随疏演義鈔』九〇巻を著した。この故事に倣って、ここでは澄円が『十勝論』に続いて、『輔助義』を和文で著したとしている。
- (67) 光明天皇（北朝）貞和丁亥三年（一三四七）。
- (68) 陰暦二月一五日。
- (69) 九軸の妙文：善導「五部九巻」を指す。
- (70) 能仁氏：釈尊のこと。
- (71) 四生の汨没：四生とは胎生・卵生・湿生・化生の四種、汨没とは水中に沈むこと、ここでは生きとし生けるものが輪廻することを指す。
- (72) 司南の大輅：司南とは指南と同義、大輅とは天子の乗る車のこと。
- (73) 癡愛：心の暗い愚かさで貪りのことで、三毒のうちの愚癡と貪愛を指す。
- (74) 超越二死：二死とは分段生死（一定の際限がある三界内の生死）、變易生死（菩薩らが自在に変化改易できる生死）のこと。三界の内外においても、称名によって往生できるとされる。
- (75) 津梁：河を渡る筏のこと。
- (76) 泥梨：地獄のこと。
- (77) 率土：海沿いの地方、辺境の地という意味から、転じて全土のこと。

- (78) 窃窃焉…声をひそめて話すさま。
- (79) 芒芒焉…ぼんやりとしているさま。
- (80) 賓賓…かしこまってつとめるさま。
- (81) 湯湯兮…河や波が早く流れる様
- (82) 巔巔…「巔」・「嶽」はともに高い山、頂のこと。
- (83) 嶭嶭兮…山の高くけわしい様子。
- (84) 嚶々…喜び嘆息するさま。
- (85) 竜象…『綜佛年報』三二、一四七頁、註二〇。
- (86) 妙雲牟尼…竜樹を指す。竜樹の本地が妙雲相仏とされる。
- (87) 光明黒谷…善導・法然を指す。
- (88) 御寇…「御」は「禦」に通じる。外敵を防ぐこと。
- (89) 鸞鑑…鸞鏡のこと。鸞鳥を背に彫った立派な鏡。
- (90) 至人…十分に道を修めてその極致に達した人のこと。
- (91) 毘賛…そばに付いて補佐する。
- (92) 南呂…貞和戊子（一三四八）陰曆八月。
- (93) 至理…最高の理り。
- (94) 大極…中国の宇宙観で、もともと根本となるもの。
- (95) 毘提夫人禁閉の難…『観経』に説かれる韋提希夫人幽閉のこと。毘提は韋提希の異訳。
- (96) 三摩鉢提…三摩跋提・三摩鉢底と同じ。精神統一によつて心が安らかになった状態をいう。
- (97) 鉅公名儒…偉大な人や名高い儒者。
- (98) 能仁付属の明詔…ここでは『観経』末尾に説かれる阿難への念仏の付属を指すと思われる。
- (99) 卓犖…この上なく優れているさま。
- (100) 吾宗の高祖…善導大師のこと。
- (101) 握玩…大切にしながら味わい楽しむこと。
- (102) 梯航…手引き、案内のこと。

- 103 壺奥：物事の奥深いところ。
104 棚裏の機関：傀儡を操る棚の裏の仕組み。
105 木鐸：世人に警鐘を鳴らし教え導く人。
106 細碎：細々して煩わしい。
107 蠡：ひょうたんを割って作った器。
108 屠雍：屠維（十千の己）のことか。貞和年間に己がくるのは、貞和五年（一三四九）。
109 星紀：十二次のひとつ。丑。
110 仲呂：旧暦の四月。
111 三部：密教の金剛界と胎藏界の両部に蘇悉地法を加えたもの。